
She Loves Me

KNT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S h e L o v e s M e

【Nコード】

N 2 2 3 0 C

【作者名】

K N T

【あらすじ】

普通の青年が、恋人を失い、職を失い、精神を失うお話です。

ひとりの人が生身から記憶になる過程と、それを受け入れる脳の防御について、

1 . I l o v e y o u

- - - - -
- - - - -
- - - - -

俺はあくびをしながら、助手席の由美を見た。

由美はポテトチップスの袋を手に、窓の外の風景を見ている。と、
思ったが、どうやら眠っているようだ。

時計を見ると二十三時半。今日は朝早くに起きたので、無理もない。

俺の仕事が忙しくて、このところ二人で出かけることが全くなかった。

俺は二十八で、もうどこかではしゃぎたいと思うような年ではないし、一緒に暮らしているとデートも億劫になる。しかし、由美は二十一になったばかりで、遊びたい盛りだ。

それに、田舎から一人で東京に出てきているので、俺以外遊び相手もない。

「たくちゃん、次の日曜は？仕事？会議？」

由美は、まだ火曜日だというのに、俺にそう聞いていた。

「どうだろうな。休めたらいいけどな」

実際、せめて金曜くらいにならないと、休みを取れるかなんてわからない。

「休みだったら、どっかいこ？」

わかった。と返事をしても、これまで何度も期待を裏切られた経験から、由美は喜ばない。

由美の機嫌を損ねたくなかった俺は、どこに行こうか？と聞いた。

まるで、そのことばかり考えていたかのように、次から次へと希望が出てきた。

最近できたテーマパーク、話題の商業ビル、そして夜は、仕事場の先輩から聞いた夜景スポット…。

あと二週間で、今年も終わる。だから、仕事も忙しくなる。

でも、次の日曜だけは何かしよう。

俺はそう思って、木・金・土と三日間、朝は八時に早出し、深夜二時まで残業をこなした。

俺が、転勤で赴任していた仙台から、東京に戻ってきたのが今年の一月。

仙台で付き合い出した由美が、俺について東京に来たのが三月。

過保護に育ったため、一人ではタクシーにも乗れなかった由美が、専門学校を卒業したら、一人で東京に来るという。

就職も、学校の斡旋ではなく自分で探す。ちゃんと家事もするから、という。

俺は、うれしかった。

あんなに甘えていた親元を離れ、あんなに仲のよかった友達と別れ、あんなに苦労して決まった美容室への就職もキャンセルし、一人では何もできないくせに、一人で俺のところに来るのか。

就職なくても、お前一人くらい俺が養ってやる。

お前が家事なんてできなくても、俺は今まで一人でやってきたのだから、別に困らない。

俺んどこに来い。

あれから、十ヶ月。

由美は美容室に就職し、上手くやっている。

洗濯も掃除も覚え、旨い料理が作れるようになった。

ある夜、仕事で行き詰まっていたとき、寝たふりをしながら考え事をしていた。延々と。

由美はそつと俺の背中を抱き、「あたしが守ってあげる」といった。

俺が寝ていると思ったのか、起きているのを知っていたのか、ただ、俺が苦しんでいることはわかっていたようだ。

ガキのくせに、と思いながら、由美と出会ったことに感謝した。

こいつが、俺の最後の女だ。

こいつとなら、一生一緒にやっていける。

一緒に暮らしはじめた今年の、最後の日曜日。

いろんな大切なものを仙台において、俺だけを取ってくれたのだから、俺も少しは何かしてやらないと。

そうして、土曜日の夜二時に仕事をすべて片づけ、家路についた。

玄関を開け、電気をつけると、由美は寝ていた。何故か俺のシャツを着て寝ている。

そうか。

俺は洗濯機の中を見た。

やっぱり。

また、洗濯が終わったあと、干すのを忘れて寝たようだ。いつも着ているピンクのパジャマが、濡れてしわくちゃのまま入っていた。

俺は、洗濯物を干そうかと思ったが、明日に備えて早く寝ることにした。

朝七時に起きて、車で二時間。行きたがっていたテーマパークで二人ではしゃいだ。

そこからまた、車で二時間。夕方には、人気のテナントビルに着き、ショッピングをして食事をした。

そしてさつき、関東で一番といわれる夜景を見に、山頂まで一時間のドライブをしてきた。

夜の山頂は耐え難い寒さだったけど、行ってよかった。

いつもは見えない星と、忘れていた綺麗な光の街と、こいつの喜ぶ姿が、俺を素直にしてくれた。

「由美、いつもありがとうな。お前と一緒にいられて、本当によかった」

由美は声をあげて泣きながら、俺の息を止めるほど強く抱きついていた。

本当に、よく頑張ってくれた。

お前は俺の恋人で、親友で、妹で、娘で、母だ。

お前が、何より大事だ。

2 . S h e ' s g o n e

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「たくちゃん、あたしが寝たら起こしてね。たくちゃん寝不足だし、あたしずっと話しかけるから」

由美は山を下りるとき、俺に言っていた。

わかったよ。

そうついいながら起こす気はなかった。

疲れていたので、話すのも大変だ。運転がやっとである。

由美が寝ているのを見て、俺はほっとした気持ちで運転を続けた。

家まで、あと一時間くらいかな？

そうついいながら車を走らせた。

俺が乗っているのは、今は人気のないスポーツカーだ。女つけは悪いが、よく走る。

サスも固めで、ふわふわせずに気持ち良く曲がってくれる。

この程度の峠道なら、夜とはいえ何の緊張感もない。

俺はごく緩いカーブを曲がりながら、ポテトチップスの袋が由美の手から落ち、中身がフロアに散乱するのを見た。

オイオイ、勘弁してくれよ。掃除が大変だろ。

その一瞬に、左の後輪がグリップを失ったのを感じた。

…滑った。

その程度にしか思わなかった。スピンするスピードではない。

俺は、路面が凍結していることを忘れていた。ここは街ではない、山だ。

予想に反して大きく滑りだす後輪に、慌てた。

急いでカウンターを当てるが、間に合わない。

車はスピンした。

こうなってしまったら、あとは何かにあたって止まるのを待つしかない。

スピードが出過ぎていたが、普通スピンすれば車速は徐々に落ちる。

しかし、路面にあるのは雪か氷か、スピンしても車速が落ちない。

… 由美！

ハンドルを持っている俺と違い、由美は何にもつかまってない。

この揺れで目が覚めたかもしれないが、身を守る余裕はないはずだ。

このスピードのまま衝突するのは、ヤバイ。

俺はハンドルを放して、由美の頭を守ろうと体を助手席に向けた。

その瞬間、車は電柱に衝突した。左側面から。

つまり、由美の方から。

電柱にぶつかっても、車は止まらなかった。

合計三回、何かに衝突して車は止まった。

俺は、頭と胸を強く打ち、息が止まり、思考も一瞬止まった。
何秒間か、気を失っていたかもしれない。

… 由美！ 由美！

上下左右がわからず、三百六十度を見回して、左手に由美を見つけた。

助手席のガラスが割れ、由美は、割れた窓から上半身を外に投げ出している。

下半身が車内に残っているが、血も出ていないように見える。

「由美！」

俺は運転席から助手席に身を乗り出した。

気を失っているらしい由美を起こそうと、背中を揺さぶった。

重い。揺れない。

真っ暗な窓の外に目をやると、それは夜の闇ではなく、壁だった。壁と車の間は五センチも開いていない。

その間に、由美は胸から上を挟まれていた。

俺は開かないドアから出るのをあきらめ、割れたフロントガラスをくぐって、車外に出た。

由美、早く助けないと！

急いでボンネットの上から、壁と車体の間を覗き込んだ。

助けないと、早く！

急がないと！

由美！

助けるも何も、その状態で生きているはずがなかった。

見るんじゃないかった。

由美…。

俺は、由美の死を認識したからか、頭を打ったせいか、ボンネットの上で気を失った。

3 . I g o i n s a n e

- - - - -
- - - - -
- - - - -

俺は、警察署を出て立ち止まった。
俺は次に、どこに行くのだったか。そうだ、病院だ。
思い出して、俺は病院に向かった。

昨日の事故以来、別に後遺症も何もないが、医者の指示で今日も検査することになった。

俺は、通夜にも葬式にも出してもらえなかった。

由美の両親は、俺が由美を殺したといって、俺を責めた。
事実、そうだ。由美の両親に殺されても、文句など言えない。
取り返しもつかないし、責任も取れない。

俺が死んで詫びても、由美はもう戻ってこない。

―別に良いじゃん。仕方ないよ。わざとじゃないし。

不意に頭に、そんな言葉が浮かんだ。

そういう言葉が浮かんでくる自分に驚いた。

何を言ってるんだ、俺は。死なせたんだぞ？恋人を。

そういいながら実は、俺は違和感を感じていた。

事故以来ずっと、罪悪感が薄すぎる。

悲しみだけはひどい。

会いたくて話したくて、抱きたくて狂いそうだ。
生き返ってくれ。

なかったことにしてくれ。

でも、やったのは俺だろう。

なんで、もっと自分を責めない？

それが不思議だった。

俺はそんなやつだっけ？

もう少しまともな感覚を持っていると思っていた。

そう考えているうちに、大きな病院に着いた。

昨日と違う医師だった。

質問の多い、患者を子供のように扱う先生で、俺はうんざりしながら、質問に答えていた。

カウンセリングを受けに来たわけではない。
さっさと検査を終わらせてくれ。

なぜか検査はなかった。

不思議に思ったがまあいい。

これ以上病院にいるのはうんざりだ。

今ごろ、仙台は葬式の準備かな。

生きていなくても、死んでいるとしても、もう一度由美の顔を見て、
触れたかった。

でも、壁と車に挟まれた由美の顔は、見ても由美と分かるものでは
なかった。

もう、あの由美の顔はどこにもない。

由美に会いたい。

―忘れなよ。由美はついてなかったんだよ。

俺は、驚きを通り越え、戦慄した。

ついてないだと？ 一体どうしたんだ俺は。

4 . S t i l l b e h e r e

- - -
- - -
- - -

その夜は、昨日の夜よりも辛かった。

由美に会えないという事実には現実感が増し、隣に由美がいないことに慣れることができず、これからの暮らしに希望が見出せず、絶望に包まれていた。

由美ほど愛せる女とは、もう出会わないだろう。
ずっと一緒だと思っていた。

もう、あんな幸せな日はないだろう。
そんな日が来て欲しいとも思わない。

…生きようかな、死のうかな。

―何いってんの。まだまだ人生長いじゃん。気にしすぎたら、損だよ。

俺はもう反応しなかった。

無意識のうちにそういう考えが浮かぶ自分に、俺は絶望しきっていた。

ベッドに寝転んで天井を見ながら、俺は思った。

由美もいないし、俺がこんなに薄情だったことも分かった。

もう、生きたいなんて思わない。
死んだほうがいい。

―だめだって、たくちゃん！ いいから忘れなよ。

俺は体を起こした。

たくちゃん？

―あたしは気にしてないよ。死ぬなんていわないで。

「由美？ ここにいんのか？」

驚きと期待で、血が沸騰した。

由美と話せているのか？

視線が由美を探す。

―いるに決まってるじゃない。あたしがたくちゃんの側からいなくなるわけないでしょ？

本当に聞こえる。

頭の中ではなくて耳から。

いるんだ、由美が！ ここに！

流していた涙が、絶望の涙から喜びのそれにかわった。

「由美、戻ってきてくれたんだな？」

―あたしはずつといたよ、たくちゃん。

「由美…、会いたかった…。会って謝りたかった…」

―いいんだよ。仕方なかったんだよ。お願いだから、気にしないで知ってるよ。あるときあたしを守ろうとしてくれたこと。ありがとうね。

俺はもう、それ以上声が出なかった。

由美と話せて、謝ることが出来て、由美が許してくれた。

神様がいるなら…、いや、いるんだろうな。
だって、俺と由美を会わせてくれた。

―たくちゃん、顔を上げて。

俺はまっすぐに顔を上げた。

電気の消えた部屋、暖房もついてない。
さっきまで闇と絶望に満たされていた、かつて由美の生きていた部屋。

顔を上げて前を見ても、やはり由美はいないが、でも話しが出来た。
こんな幸せはない。

—こっちだよ、たくちゃん。

俺は声のするほうへ顔を向けた。

そこには由美がいた。

いつものピンクのパジャマ、いつもの笑顔。
笑ってる。

—あたし死んじやったけど、ずっと一緒だよ。

死んでようと、生きてようと、関係ない。
由美なら、由美といられるなら。

5 . S t a y w i t h h e r

- - - - -
- - - - -
- - - - -

その夜、俺と由美はベッドに並んで座り、朝まで話をした。
思い出話で笑って、愛を確かめた。

日がすっかり昇って、俺の腕の中で丸くなっている由美が言った。

「たくちゃん、会社行かなきゃ。もうこんな時間だよ。遅刻だね」

俺は会社に行く気はなかった。

「辞めるよ、会社は。少し寝て、どこかに遊びにいこう」

由美が生きていたとき、由美に何もしてやれた気がしない。
死ぬなんて思ってたから。

今は違う。

由美だけに時間を使いたかった。

由美は反対したが、俺は会社を辞めた。

だが、病院に行くのだけは譲らなかった。

「病院は、絶対に行って！ちゃんと検査して！」

行っても検査なんてしないんだ。

なれなれしい医者が長話するだけ。

そう思いながらも、心配をかけるくらいなうらと思ひ、俺は病院に行
った。

由美は、部屋の外には出られないらしい。

だから、病院にも遊びにも行けないのだと。

どうしてかは分からないといていた。

帰ってきて由美が消えていたら、そう俺は心配したが、由美は真っ直ぐに俺を見て「大丈夫」といつてくれた。
由美がそう言うなら、大丈夫だ。

やはりこの医者嫌いだ。

俺は小学生か？

その子供を相手にするような話し方をやめろ。

それに、何を言ってるんだか、よく分からない。
わからないから適当に返事をするが、医者の話しは一向に終わらない。
い。

こいつと無駄話をしている暇があるなら、由美といたい。
それしか頭になかった。

ようやく家に帰らせてくれるらしい。

しかし、紹介状を渡された。

次からはこの病院に行けという。

検査もしてないくせに適当なことをいうものだ。

もう嫌だ。

病院なんか行かない。時間の無駄だ。

由美には完治したといえればいい。

今は、由美から離れたくない。

家に着いたら、そこにはちゃんと由美がいた。

部屋が汚いから片づけたかったけどできなかった、ハンバーグを作
ってあげようと思ったができなかった。

そう由美は言った。

部屋からは出られないし、物理的なことも出来ないらしい。

まあ死んでいるのだから、そんなものかもな。

俺はなんとなく、納得できた。

別に苦ではなかった。

由美がいるなら、別に世話してくれなくても、外出できなくても、
構わない。

由美がいるなら、何もいらなに決まっている。

ただひとつ、俺が恐れているのは、ただ一つだ。

食事もせず、由美と話をし続けた。

今日は思い出だけでなく、これからの話も。

俺は由美以外何もいない。

最低限の食事とその他、あと由美がいるこの部屋の家賃。

金なんて、それ以上はいらない。

「しばらくしたら、バイトでもする。それまでは貯金で過ごす」

それより、一番聞きたいのは――。

「なあ由美」

「ん？」由美はテレビを見たまま答えた。死んでいるとは思えないくらい自然だ。

「いつまで、ここにいられるんだ」

俺は答えを恐れた。

一度由美を失ったのは、突然だった。

もし、次にまた失うことがあったとしても、そのときは突然ではない。

ちゃんと、後悔しないように、しっかりと別れないと。だから、聞いた。

しかし、由美の返事は俺の望みうる、最高のものだった。

「ずっと一緒だよ。たくちゃんが変わっちゃわないかぎり」

6 . C r a z y f o r y o u

- - - - -
- - - - -
- - - - -

それから二週間、俺はほとんど食事もせず、外出もせず、由美と一緒ににいた。

話して笑い、抱き合ってキスして、セックスもした。

由美が死ぬ前以上に幸せだったかもしれない。
お互いこれ以上ないくらい素直で、何でも話せるし、何が言いたい
かも手に取るように分かる。

病院も会社も、何も邪魔するものはない。

二人の心以外何もないが、何もいらなかった。

由美、俺が死ぬまでこうしてような。

俺が死んでも一緒にいよう。

これ以上の幸せはない。

今が人生の中で、最高の時間だ。

そのとき、チャイムが鳴った。

もちろん出ない。邪魔をするな。

すると驚いたことに、訪問者は勝手にドアを開けて部屋の中に入っ
てきた。

鍵、かけてなかったっけ？

「拓郎！」

久しぶりに見る母の顔だった。様子がおかしい。

「どうしちゃったの、拓郎」

泣いているのか？

まあ人身事故、失業と相次いだから、ショックは大きいだろうが、
二週間以上経っている。

その取り乱し方は大袈裟だ。

母は部屋を見回し、嗚咽を漏らした。

泣きながら、ごそごそと部屋を片づけ出した。

俺は黙って目で追った。

俺も気づかなかったが、洗濯物の山にカビが生えていた。冬なのに。

それに、冷蔵庫の中のものがほとんどすべて腐っていたようだ。

母が開けた瞬間にすごい匂いが充満した。

俺は、それに気づかなかった俺自身がおかしくて、笑ってしまった。由美と一緒にいることで頭がいっぱいだったから。

笑いながら由美を見ると、由美は全くの無表情で部屋の角に立っていた。

きつと、母親には由美が見えないんだろう。

ひとしきり片づけをした母親は、俺に向き直って言った。

俺はまだおかしくて、笑っていた。

「拓郎、お願いだから病院に行ってちょうだい」
泣きながら母が言う。

そんなこと言っただけで、あのバカ医者には検査もせず長話をするだけだ。

ひょっとして、突然の退社やこのだらしない生活が、事故の後遺症のせいだと思っているのか。

生前、母と由美は面識があった。

母は何やら勘違いして錯乱しているようだし、安心させてやったほうがいい。

本当のことを言おうか。ここに由美がまだいることを。

俺は由美を見た。

表情の消えたまま、真っ直ぐに正面を見て立っている。

人形みたいだ。

母はずっと何か言っているが、全く意味が分からない。よっぽど混乱しているのだろう。

俺は気の毒になり、由美のことを話す決意をした。

「母さん。落ち着いてくれ。俺は投げやりな気持ちで、こうしているわけじゃないんだ」

そして、由美が戻ってきてここで生活していること、見えないだろうが今もここにいることを話した。

こっちがびっくりするくらいあっけなく、母はそれを受け入れた。やはり、由美の姿は見えないようだが、「わかったわ」と、事実を理解してくれた。

俺は正直ほっとした。

信じないだろうと思っていたから。

「わかった。わかったから、病院には行ってちょうだい」
まだ言っている。

そうまで言うなら、我慢して行ってやったほうがいいかもしれない。

そしてしっかり検査して、異常がないことを確かめて、安心させてやろう。

な、由美。それがいいよな。

由美を見ると、真っ直ぐこっちを見ていた。

さっき表情のなかった顔には今、涙が溢れていた。

7 . D r e a m i s o v e r

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

昨日から、由美がずっと泣いている。
わけを聞いても謝るばかりだった。

「ごめんね、たくちゃん。あたし、一緒にいたかったの。ごめんね」

謝るな由美。何で謝るんだ。

俺だって一緒にいたいに決まっている。

他の全てを捨ててでも由美と一緒にいたいんだ。謝るな。

「いけないことって、わかってたんだよ。ごめんね」

「もう謝るな。俺は病院に行って、すぐに帰ってくる。そしたら、落ち着いて話をしような」

俺はそう言っで、いつも着ているピンクのパジャマの襟をなおしてやった。

ピンクの生地がところどころ涙で濡れて、赤く染まって見える。

風邪ひいたらよくない。

そう思っで濡れたパジャマを脱がせて、俺のシャツを着させた。

死人でも風邪ひくのか？まあいい。

「すぐ帰っでくるから、待っでな」

そういっで、シャツに着替えた由美にキスした。

由美は俺に「愛してるよ」といっで、俺はうなずいた。

異様に大きな病院だっで。

家から、電車で一時間半もかっで。

その上、待合室でもう三十分も待っでいる。帰りたくて仕方がない。でも、これで最後だという思いが、かろうじて俺の忍耐力を支えた。

ようやく受付が俺の名前を呼んだ。

でかい病院だけに、受付から診察室までも遠いようだ。丁寧に道順を説明してくれる。

丁寧なのはありがたいが、この女も妙になれなれしく、人を子供扱いしたような話し方をする。

なんで病院にいる人間というのはこうなんだろうか。

俺はますます、これが最後だという思いを強めて、診察室へ向かった。

五分は歩いただろう。ようやく、それらしいフロアに出た。

俺はふと、おかしいことに気がつき、足を止めた。

周りの案内板をよく見ると、外科はこのフロアではない。

あの案内の女、間違えて案内したらしい。

俺は歩いている看護婦を呼び止め、紹介状を見せた。

「この先生のところに行きたいんですけど」

看護婦は俺の顔をちらっと見て、言った。

「はあゝい、先生はこちらですよゝ。じゃ、こっちに来て下さいねゝ」

この女もだ。“はゝい”とは何だ。

半ばあきらめて、黙って案内してもらう。

辿り着いた診察室には、精神科 という札があった。

精神科？何の間違いだ、それは？

俺はもう、帰りたくて帰りたくて仕方なくなった。

こんな遠くの病院まで来て、さんざん待たされ、やっと辿り着いたところが、精神科。

カウンセリングでもするつもりか？

苛立ちを隠せそうになかった俺は、トイレに行くことにした。顔でも洗えば少し落ち着くだろう。

トイレだけはすぐ近くにあった。

俺は用を足し、手を洗った。顔も洗いたいところだが、タオルがない。

しかし、散々である。

俺は精神科になど用はない。

そう呟きながら顔を上げ、鏡を見た。

俺は一瞬、鏡に映ったその男が誰なのか、分からなかった。

ぼさぼさの脂ぎった髪、伸びたひげ、目は大きく窪み、真っ赤に充血している。

その周りには真っ青なクマ。

それだけではない。

鼻と口からは、それぞれ鼻水とよだれが流れて、固まって白い固体になっている。

それが自分だと気づいた俺は、頭を下げて自分の体を見た。

よだれの跡がついたよれよれのＴシャツ、伸び切ったスウェットパンツ。

これしか着ていない。

一月にこの格好は異常である。

足元は明らかに室内用のスリッパで、靴下さえ履いていない。

俺は愕然とした。

何をやっていたんだ俺は。

なぜこんな格好で出歩いているんだ。
ここに何しに来たんだ。

精神科…。

俺はもう一度、鏡を見た。
やはり俺だ。間違いない。

今までの解し難いことが、次々と頭に浮かんだ。

医師の応対、母親の反応、意味を理解できない会話、そしてこの格好…。

たった今、それらに整合性を感じた。

今は、目の前の俺を自分だと認識できる。

精神科を紹介された意味も分かるほどに、正常な思考を取り戻した。

俺は、たった今、回復した。

そのことが、はつきりと分かった。

— $\mathcal{U} \subseteq \mathcal{V}, \mathcal{U} \vdash \varphi$ —

俺はトイレを飛び出し、全速力で階段を駆け降りました。病院を出て、息もつかず駅へと走った。

8 . Gone again

[illegible]

由美、おまえはまだいるか？

お前は俺が作り上げた妄想だったのか？

それとも、本当に戻ってきてくれていたのか？

いまから、すぐに帰る。だから、そこにいてくれ。

消えないでくれ、行かないでくれ。

もう、一人にしないでくれ。

電車を飛び降りた。

人ごみをかきわけ、駅を出た。

―由美、由美、そこにいてくれ。

肺が潰れるほど、走りつづけた。

―もうすぐ帰る、そこで待ってる、由美。

マンションの階段を駆け上がり、鍵のかかっていないドアを開け、部屋に入った。

由美はいなかった。

部屋には、気配もおいも、何もない。

由美……！

俺は絶望感に包まれ、その場に倒れた。

帰ってきてくれ、由美。何でまた行ってしまったんだ。

幻でもよかった。精神異常でもいい。

お前といたかった。

お前が消えるくらいなら、正気になんてなりたくなかった。

俺は由美が死んだその日と、同じ悲しみを背負った。
後悔の大きさも同じだ。

今度こそ、一緒にいられると思った。
これからはずっと一緒だと信じていた。

結局、由美は戻ってきてはいなかった。

すべては俺の妄想か、幻だった。
でも、それでいいじゃないか。

現実を受け入れられるほど、たやすくはない。

もう由美はいない、話せないし触れられないんだ。
見ることさえも。

そんな現実には捨てて、幻でも由美といたかった。

由美。

9 . I r e m e m b e r y o u

[illegible]

何時間、いや、何十時間、絶望と戦っただろう。

一人の部屋で、俺はベッドに転がり天井を見ていた。

結論は初めから同じだ。

由美は死に、帰ってきたと思った由美は、幻だった。

ああしていれば、こうしていれば。

そればかりを考えてしまうが、全て終わったことだ。

答えは、由美には二度と会えない。それだけ。

俺は目を閉じた。

もう、
疲れた。

——そして、由美の夢を見た。

夢の中で、俺は眠っていた。

「たくちゃん、ごめんね」

俺は、夢の中で目が覚めた。

——たくちゃん。あたしね、死んでもたくちゃんを見守っていこうって思ってた。

たくちゃんがあたしのことを忘れても、あたしにはたくちゃんが最後の人だから。

でも実際には、たくちゃんが泣いてても、後悔して苦しんでも、何もしてあげられなかったの。

だから……。

——本当にごめんね。でも、うれしかったよ。幸せだった。

生きているときも、死んでからも。

たくちゃんといられて、あたし、幸せだった。

俺は、ゆっくりと話す由美を、じっと見ていた。

—もう会えないけど。もう、話せないけど。

由美の目に、涙が溢れた。

その言葉が、頭に何度も響いた。

—でも、あたしはずっと、たくちゃんのそばにいるよ。

いつかいったでしょ。あたしが守ってあげるって。

信じて。

あたしは、幻なんかじゃなかったよ。

そこに、あたしはいたよ。たくちゃんの側に。

—たくちゃん。好きだよ。元気でね。

バイバイ—

目が覚めた。

夢か。

夢だったかも知れないけど、今は、本当のお別れだった。
そんな気がした。

「ふう…」

俺は体を起こし、大きく息をついた。

ありがとう由美、もう大丈夫だ。

お前のことを忘れるって意味じゃない。お前のことは絶対に忘れない。

お前のくれたすべて、忘れない。

もう、大丈夫だ。

由美がいたこの部屋から、もう一度やり直そう。

きっと、大丈夫だ。

俺は部屋を見回した。

由美の飼っていた金魚が、ゆっくりと泳いでいる。

由美が大切にしていた観葉植物が、かすかに揺れている。

由美は、たしかに、ここに居た。

もう一度大きく息を吐き、視線を落とすと、俺の座るすぐ横に、ピ
ンクのパジャマがあった。

——なんでここに。

不思議に思いながら、パジャマを手にとった。

広げてみると、その胸元は点々と濡れて、赤く染まっていた。

——あたしは、幻なんかじゃなかったよ。

そこに、あたしはいたよ。たくちゃんの側に。

もう、大丈夫だ。

くオワリく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2230c/>

She Loves Me

2011年1月26日03時07分発行